

『今月の天候と農作業』

通巻第5688号
6月号
令和6年5月31日発行
宮崎県
宮崎地方気象台



【特に注意を要する事項】

特になし。

【予報のポイント】

向こう1か月の気温はほぼ平年並ですが、1週目は冷涼な空気に覆われやすいため低い
です。

前線や湿った空気の影響を受けやすい時期があるため、向こう1か月の降水量は平年並
が多い見込みです。

【確率(%)】

要素	予報対象地域	低い (少ない)	平年並	高い (多い)
気温	九州南部	30	40	30
降水量	九州南部	20	40	40
日照時間	九州南部	30	30	40

【予想される向こう1か月の天候】

向こう1か月の出現の可能性が最も大きい天候と、特徴のある気温、降水量等の確率は
以下のとおりです。

天候は平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。降水量は、平年並または多い確率と
もに40%です。

<1 週目の予報> 6月1日(土)～ 6月7日(金)

高気圧に覆われて晴れる日が多いでしょう。

<2 週目の予報> 6月8日(土)～ 6月14日(金)

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

<3 週目から 4 週目の予報> 6月15日(土)～ 6月28日(金)

平年と同様に曇りや雨の日が多いでしょう。

明日から1週間の、日別の天気や気温などは、週間天気予報

(<https://www.jma.go.jp/bosai/forecast/>)を参照してください。

普通作物

◆早期水稻

1 追肥と水管理

コシヒカリは倒伏しやすいので、幼穂長1cmの適期に葉色を見ながら、追肥しましょう。

幼穂形成期の水管理は、間断かん水を基本とします。ただし、16℃以下の低温が予想される場合には、幼穂を低温から保護するために、深水にしましょう。

2 病虫害対策

いもち病は穂ばらみ期と穂ぞろい期の防除を基本に、多発時には臨機防除を行います。

カメムシ類は、穂ぞろい期とその7～10日後に2回の防除を行います。地域での一斉防除が効果的です。また、カメムシ類の繁殖源である畦畔や周辺草地の草刈りを出穂の2～3週間前迄に実施することで防除効果が高まります。

◆普通期水稻

1 基肥と代かき、田植基肥は、地力や堆肥の散布量などから施肥量を決めます。

代かきは、除草剤の効果を高めるために田面を均平にしましょう。

田植は、栽植密度や苗の掻き取り量、植付け深さなどに注意します。

2 病虫害対策と除草

スクミリングガイ（ジャンボタニシ）が多い水田では、薬剤による防除や浅水管理を実施しましょう。

除草剤はラベルの記載内容を必ず確認し、ヒエの葉齢を見て、散布遅れがないようにしましょう。処理後7日間は掛け流しせず止水します。ジャンボ剤は必ず5cm以上の水深を確保しましょう。また、田植同時処理では、田面の均平や植付深度、田植後の土の戻りに注意し、田植後は速やかに入水しましょう。

(福川 泰陽)

施設野菜

◆収穫終了後の管理

きゅうりではアザミウマ類、トマトではコナジラミ類が媒介するウイルス病が依然として多く見られます。栽培終了時には、次の栽培に向けて、ハウス内の害虫を死滅させてから次作に向けたほ場準備を行いましょう。

また、ハウス内の作物残さを持ち出す前に、ハウスを10日間閉めきって蒸し込み処理を行うなど、害虫を死滅させた上で残さを持ち出すようにします。特にウイルス病が発生したハウスでは、蒸し込みと合わせて周辺雑草の除草を実施します。

◆夏秋果菜類の栽培管理

梅雨に入り曇雨天日が多くなるため、雨よけハウス栽培のきゅうり、ピーマン、にがうり等では、日照不足による草勢低下や病害虫の発生が予想されます。次の点に留意した栽培管理を行いましょう。

- ① 通路や畝間に滞水しないように、かん水は少量を多回数行います。
- ② 着果負担を軽減するため、不良果などを中心に摘果を行います。
- ③ 追肥は1回当たりの窒素分量を少なくします。また、草勢が弱い場合には葉面散布等により草勢の回復を図ります。
- ④ 摘葉や整枝・誘引を適期に行い過繁茂を防ぎ、通風や採光を良くして、葉の濡れ時間を短くします。
- ⑤ 大雨等に備えてほ場の周りに排水溝を掘るなど、排水対策を行います。
- ⑥ また、曇雨天が続いた後、急に晴れた場合は、「葉やけ」や「萎れ」が発生しやすくなるため、日射が強い時に備えて、遮光のための寒冷紗などを準備しまししょう。

(境田 耕作)

葉茎根菜類・いも類

◆共通（排水対策）

多雨による排水不良が懸念されます。畝間に雨水が堪ると、根傷みや病害の発生を助長するため、適宜、排水路などの点検・整備を行い排水を良くしましょう。

◆かんしょ

トンネル栽培では収穫期になります。試し堀りを行い、芋の肥大を確認してから収穫を始めます。植付け後130日以上になると芋の皮色や形状が悪くなるため、適期収穫を心掛けましょう。

普通栽培では通路につるが伸びる前に、通路に除草剤を散布します。また、「黄化」や「萎れ」のある株の地際部に割れや黒変がないか確認し、これらの症状が見られたら、速やかに除去しましょう。除去した周辺の株には薬剤の予防散布を行います。降雨が長期間続く時は、雨間にも薬剤による防除をしましょう。

苗取りが終わった育苗床は、速やかに片付けます。可能な限り育苗床に残った種芋は持ち出します。持ち出せない場合は、分解促進剤や石灰窒素を散布し、土壤水分を確保した上ですき込み、分解を促進します。

◆さといも

トンネル栽培では収穫期になります。試し堀りを行い、10α換算の収量が1tに達したら収穫を始めましょう。

さといもの重要病害である疫病の蔓延を防ぐため、収穫後は速やかに耕耘して残さをすき込みましょう。

また、収穫前のほ場では、疫病の発生を防止するため、薬剤が株元までかかるように散布しましょう。

(中村 剛)

果樹

1 常緑果樹

◆温州みかん

今年の極早生品種の着花量は平年よりも少なく、園地や樹によって着花のばらつきが見られます。また、開花期以降の日照時間が平年よりも短いため、生理落果が多くなることが予想されます。摘果は生理落果後に結果量を確認して実施しましょう。

◆かんきつ全般

梅雨に入ると、黒点病の防除が特に重要です。薬剤散布後に300mmの降雨があると薬剤の効果がなくなるため、250mm程度の降雨があったら、次の薬剤散布を行いましょう。

6月はカイガラムシの発生が始まる時期です。上旬には必ず薬剤散布を行い、密度を減らしましょう。

◆完熟きんかん

6月下旬の1番花の結果率を上げることで、大玉果生産と早期出荷を同時に実現できます。出蕾期から開花期の加温により十分な温度を確保しましょう。安定した結果量を確認するには受粉環境が重要です。開花期に雨天が続く場合は、ビニル被覆を実施し、昼間も加温しましょう。

◆マンゴー

梅雨時期に入ると湿度が高く推移し、炭疽病や軸腐病の多発生が懸念されます。こまめな収穫や、殺菌剤の散布、適正な温湿度管理等の対策を徹底しましょう。また、曇雨天日後の急な強い日射により、日焼け果やあざ果が発生する場合があります。日焼け対策の遮光ネットをこまめに開閉しましょう。

収穫が終わった施設では、剪定作業に入りましょう。樹齢の進行に伴い、収量や果実品質が低下している園では、改植を検討しましょう。

2 落葉果樹

◆くり・かき

安定生産のためには施肥が重要です。夏肥の施用を必ず行いましょう。この時期の施肥は樹勢低下防止、果実肥大促進、翌年の結果母枝の充実に有効です。年間施肥量の2割程度を施用しましょう。

(黒木 宏憲)

花き

◆夏秋ギク

曇雨天が続いた後の晴天時には葉焼けの発生が多くなります。事前にカルシウム剤の葉面散布等を行い、当日は換気や遮光、葉水等の対策を実施します。

「フローラル優香」の8月出荷作型では、開花促進のため、消灯後から3週間程度シェード（12時間日長）を実施します。なお、貫生花の発生を軽減するため、夜間のシェード開放等、高温防止対策を実施します。

「精の一世」の8月出荷作型では、6月10日前後が消灯日となるため、消灯後にシェード（11.5時間日長）を実施します。高温による開花遅延防止のため、日中の遮光や換気、夜間のシェード開放等、高温防止対策を実施します。

◆秋ギク

親株育成の時期です。健全な穂を確保し親株ほ場における防除を徹底すること等により、白さび病等の罹病株を本ばへ持ち込まないように留意しましょう。

◆デルフィニウム

11～12月出荷作型の育苗作業が始まります。

早期抽だい防止のため、夜冷育苗を本葉2枚展開時から16時間、10℃で行います。健全苗育苗のために適切なかん水や施肥管理を実施しましょう。

◆ホオズキ

7月出荷作型では、着色促進のためのホルモン剤処理の時期です。できるだけ涼しい時間帯に散布し、散布前後数日は寒冷紗等で遮光して、高温防止対策を実施しましょう。また、着色ムラや薬害の原因となることから、ホルモン剤散布と他の農薬の近接散布は避けましょう。

◆シキミ

梅雨時期は黒シミ斑点病の感染のリスクが最も高くなる時期です。適期防除を実施しましょう。

◆キイチゴ

多湿条件下では、べと病や斑点性病害の発生が多くなります。定期的な予防散布を行いましょう。

(山塚 裕美)

畜産

◆家畜防疫対策

国外では、ASF（アフリカ豚熱）等の発生が確認されており、国内への侵入リスクが高まっています。

家畜伝染病から、農場を守るため、畜舎内外の消毒や人・車両・物資の消毒と野生動物等の侵入防止対策を徹底し、農場にウイルスを侵入させないように、飼養衛生管理基準を遵守しましょう。

◆家畜

雨が多くなり、気温、湿度ともに上昇し、家畜が暑熱ストレスを受ける時期になります。雨水が畜舎内に降り込まないようにし、換気を良くするためにカーテンの開閉をこまめに行いましょう。

子牛の下痢予防には、床を乾燥した状態にすることが重要です。敷料はこまめに交換しましょう。下痢を発症している子牛は隔離し、治療を行い、他の子牛に病気が伝染・拡大しないようにしましょう。

乳用牛は、暑熱ストレスを受けやすく、乾物摂取量の減少による乳量の低下等、生産性の低下につながります。換気扇や扇風機等で風を牛体に当てて体感温度を下げたり、直射日光や輻射熱を抑えるために、寒冷紗等の設置、屋根への石灰や断熱塗料の塗布等を実施し、牛舎内の昇温対策を実施しましょう。

サイレージが腐敗しやすい持期になります。カビの発生等を確認した場合は牛に給与しないようにしましょう。

◆飼料作物

トウモロコシやソルガム等の生育期になります。長雨によるほ場の排水不良は、湿害等により生育を阻害するため、ほ場に水が溜まった場合には、速やかに排水対策を実施しましょう。

(小田 弥生)

特用作物

◆茶

1 二番茶の摘採と整枝

二番茶は生育が早いいため摘採適期が短くなります。また、降雨日が多くなるため、雨の影響を考慮しつつ摘み遅れにならないよう適期摘採に努めましょう。

樹勢の強い茶園では、摘採前7日間ほど黒寒冷紗等で被覆し、積極的に品質向上を図りましょう。ただし、被覆により黒葉腐病、葉擦れ、葉焼け等が発生しやすくなるため、気象状況に注意しましょう。

整枝は、二番茶摘採の7～10日後頃に遅れ芽を除く程度で摘採面を整えます。

2 二番茶摘採後の茶園管理

施肥は、二番茶摘採前後に地域の施肥基準に準じ速効性肥料を施用しましょう。

チャノキイロアザミウマやチャノミドリヒメヨコバイ等の害虫、炭疽病等の病害に対する防除は、三番茶の萌芽～開葉期に地域の基準に準じて実施しましょう。

3 茶園の更新

深刈り更新は、樹勢を考慮し、早めに古葉が残らない高さで実施します。更新作業が遅れた場合や干ばつが予想される場合には、樹勢回復の遅れが心配されるため、強剪枝は控えましょう。

一番茶後に中切り更新を行った茶園では、中切り55～60日後に中切り面より3cm程高い位置で1回目の整枝を行いましょう。

(竹田 博文)

◆しいたけ

1 伏込み地の管理

しいたけ菌は、30℃を上回ると菌糸生長が急激に減退し、35℃以上では死滅する恐れもあります。直射日光によるほだ木の温度上昇を防ぐため、日陰が十分でない箇所には笠木等を補充しましょう。

また、梅雨時期は風通しを良くするため、草の繁茂状況に応じて下草刈りを行いましょう。

2 ほだ場の管理

梅雨に入る前に防風ネット等の撤去、周囲の雑草木の刈払いや除伐等を行い、風通

しを良くし、害菌の侵入を予防しましょう。

また、倒れたほだ木や廃ほだを整理し、ほだ場の環境を改善するとともに、害菌・害虫の発生源にならないようにしましょう。さらに、しいたけ採取後のほだ木は、今後均一にしいたけを発生させるためにも、ほだ回しや天地返しを行いましょう。

(堀川 和也)

◆たばこ

今月は、中葉系の収穫・乾燥が主な作業となります。

1 収穫作業の注意点

収穫は、適熟葉収穫に努め、取り遅れや収穫ロスをなくし、完全収穫で収量確保を図りましょう。また、立枯病などの病害葉は、クジリ取りを行い区分収穫に努めましょう。

2 異物混入防止

収穫葉にマルチ片や土砂などが付着している場合には除去しましょう。また、取下手時にも異物が混入しないように心掛けて作業しましょう。

3 病害対策と農薬適正使用

梅雨の時期は、再度、ほ地の排水対策やほ地周辺の環境整備等、耕種的病害防除を徹底しましょう。また、農薬を使用する際には、使用基準を守り、野帳・使用実績票へ正確に記帳しましょう。

4 荷造りおよび貯蔵管理

乾葉の取下手時には、過湿・過乾に注意して荷造りを行いましょう。包を貯蔵する際には、たばこ以外の臭いを有する物を避け、貯蔵害虫の被害を受けないよう全包ビニール梱包を行いましょう。貯蔵期間中は、貯蔵庫内の適切な温湿度管理に努め、品質の低下を防ぎましょう。

(宮崎県たばこ耕作組合)

◆農作業安全

熱中症を予防するために、こまめに休憩を取り水分を補給しましょう。

内容の詳細について

6月の天候と農作業の詳細内容について。執筆は県総合農業試験場及び森林経営課、宮崎県たばこ耕作組合が担当しています。各作物の病害虫の防除対策、気象災害の事前事後対策等の詳細は最寄りの支庁・農林振興局（農業改良普及センター）へ

☆「今月の天候と農作業」はホームページにも掲載しています。

(<http://nogyoukishou.pref.miyazaki.lg.jp>)

向こう 1 カ月間における農作物の主な病害虫の発生量と防除対策

作物名	病害虫名	発生量	発生状況と防除対策
早期水稲	いもち病 葉いもち 穂いもち	並 —	葉いもちの発生は穂いもちの発生につながります。九州南部地方の1か月予報では、平年より気温は高く、降水量は平年並～多い予報であることから、いもち病の発生に好適な気象条件になることが予想されます。ほ場をよく観察し早期発見に努め、病斑が認められたら速やかに液剤等で防除します。
	斑点米カメムシ類	—	斑点米の混入は極少量でも米の等級に影響するため、例年、被害の発生する地域では必ず防除を行います。防除適期は穂揃い期とその7～10日後で、2回防除を行うと効果が高くなります。 また、水田内および周辺のイネ科、タデ科などの雑草やイネ科飼料作物は、出穂開花前に早めに刈り取りましょう。
普通期水稲	いもち病 葉いもち	—	補植用の置き苗は、いもち病が発生しやすく、また、伝染源となるので早めに処分します。
	スクミリンゴガイ	—	水田の水口に金網を張り、貝の侵入を防止するとともに、生息数が多い場合は捕殺するか粒剤による防除を行います。
野菜・ 工芸作物	アブラムシ類 ハスモンヨトウ	並 やや少	アブラムシ類は、キュウリモザイク病やタバコ黄斑えそ病などのウイルス病を媒介しますので、早期発見に努め防除します。
施設野菜	土壌病害虫 コナジラミ類 アザミウマ類 アブラムシ類	—	近年、微小害虫によって媒介されるウイルス病（黄化えそ病、黄化葉巻病、モザイク病など）が問題となる事例が発生しています。媒介虫は次期作におけるウイルス病の発生源になりますので、栽培終了後は株を抜き取り、少なくとも10日間は施設を密閉し、媒介虫を死滅させてから残さを処分します。また、ほ場周辺の除草も徹底します。
いちご (親株)	ハダニ類	並	ハダニ類は親株から苗に移行・増殖するので、ほ場をよく観察しながら、早期発見、早期防除に努めます。薬剤は、葉裏にもかかるようにていねいに散布します。
果樹全般	チャバネカメムシ※ ツヤカメムシ※	— —	県内4か所に設置している予察灯では、果樹カメムシ類の誘殺数が平年と比較して多くなっています。多飛来を見てからの防除では手遅れとなるので、園内外を見回り早期発見、早期防除に努めます。特に、ウメやモモなどの結実中の果樹類では注意が必要です。
カンキツ (露地栽培)	そうか病 かいよう病 黒点病	多 並 やや多	そうか病の発生が多くなっています。降雨が続くと発病が多くなり果実への被害につながりますので、適期散布に留意し、防除が遅れないようにします。 黒点病の発生が多くなっています。枯枝は主要な伝染源となるため、園外に持ち出し適切に処理してください。
	ミカンハダニ ミカンモグリガ アブラムシ類	やや少 やや多 並	ミカンハダニは、生息密度が高くなると防除が困難になるので、寄生葉率30%または1葉当たり虫数0.5～1頭を目安に防除を行います。
茶	炭疽病 カンザリハダニ チャノコクモンハマキ チャハマキ チャノホリガ チャノミドリヒメヨコバイ チャノキイロアザミウマ クワシカガラムシ	並 並 並 並 並 やや多 並 やや少	炭疽病は、降雨が続くと発病が助長されます。今後、気温は平年より高く、降水量は並～多い予報となっており、発病の増加が予想されるため、萌芽期～成育期の防除を徹底します。 チャノミドリヒメヨコバイの発生がやや多くなっています。新芽生育期におけるチャノミドリヒメヨコバイの加害は減収、品質低下の原因となります。また、チャノキイロアザミウマの発生は、例年二番茶期から多くなります。 炭疽病、チャノミドリヒメヨコバイ、チャノキイロアザミウマは、新芽生育初期に同時防除が可能です。多発生してからは防除が困難になるので、早期発見、早期防除に努めます。

1) 「発生量」は、過去10年間の発生量と比較して、今後の発生量がどの程度になるか予測したものです。

2) ※は防除情報を発表中です。

3) 病害虫防除・肥料検査センターのホームページは、QRコードより閲覧してください。

